

相変わらず真っ青な空の下、明るい日差しに包まれた鳥葬の丘で、見覚えのあるマニ石と不思議な縁を感じる再会を果たした私は、それが確かに旧知のマニ石である事を確かめるべく、丘の上から遠くに眺められていたゴンパ(寺)を目指して、昼下がりの理塘の街を歩いていた。

丘を下ればゴンパは見えなくなってしまったが、適当にそちらと思われる方向目指して草原を横切り街外れの茶色い住宅街の路地を歩いていると、道の向うからやってきた少年達が私を指差して声をあげている。不思議に思って近づいてくる彼等の顔を覗き込んでみれば、やって来た三人の内の一人は昨日の鳥葬場で一緒にオバケの音に驚いて、私と手を繋いで逃げた少年なのだ。昨日は弟達なのか彼より幼い男の子二人と遊んでいたが、この日は同じ年頃と思われる少年達と一緒にだった。

昨日の彼は花を摘んでくれたり、私と手を繋いで歩いたり、自分の好きな動物を折り紙で折って欲しいとねだったり、石を削って作った自作のアクセサリーをプレゼントしてくれたりとちょっぴり甘えん坊を思わせる人懐こい優しい性格で可愛かったが、やはり同じ年頃の仲間の前では男のメンツがあるらしく、この日はちょっぴり小生意気でヨソヨソしい。どこの国の子供でもやる事はみんな同じなのが可笑しかった。

一緒にいる友達は私を見るとわざとズボンを下ろして見せたりする悪ガキだったが、そんな悪戯は私に何の効き目もない。彼のズボンの中身には取り合わず、少年達に「一緒にゴンパへ行きましょうよ」と誘うと、ヒマでブラブラしていただけらしい彼等はさして乗り気でも無さそうな様子ながらも私と一緒に歩き出した。

マニ石に続いて昨日の少年とも再会だ。どちらも狭い街での偶然といえばそれまでだが、改めて思い起こせばこの旅の間中で出会った出来事、知り合った友達や再会を果たせた亜丁の少年など、偶然と言い捨ててしまうには勿体無いような不思議な縁を感じさせる出来事がアチコチに転がっていたような気がした。おかげで一人旅だということに、この旅の間中何処へ行っても、私は殆ど寂しい思いなどしていない。

きっと神様が引き合わせてくれているんだ……

チベット族の人々の世界にいと神様がとても身近に感じられ、なんの躊躇も無く自然にそんな気持ちが湧いてくる。

茶色く塗り固められたような土色の住宅街は、洗濯物が干されていたり子供が遊んでいたりと理塘住民の生活の

様子が垣間見られる様で面白かった。道沿いのあちこちには近所の子の老人達が並んで座りこみ談笑している姿が見られたが、そうやって集まっている殆どの老人達の手には、赤ちゃんのおもちゃの様なハンドル式の小さなマニ車が握られている。

文字の読み書きができず長いお経を覚えて唱えるのが困難な者でも、このマニ車を一度まわせば、それで一回お経を唱えた事になり功德が得られるのだそうだ。談笑しながらマニ車をくるくる回している老人達の様子はなんだか楽しげでまるで遊んでいるように見えた。彼等の様子を見てみると、実際にそうなのかもしれないとも思っていた。

これまで旅して出会ってきた四川省深部のチベット・エリアの人々の姿や生活を通して、チベット族の人達にとっての信仰とは人が生きるために食事をしたり眠ったりする事と代わらないほど当たり前前に生活の一部になっているのが感じられた。そしてそれは私たちが日々の生活の中で食事や睡眠をささやかに楽しんでいるように、彼らが我が家を神様の絵や捧げ物で飾り上げ、日々深い信仰をささげる事自体が彼等の趣味や娯楽の一部ともなっているように思われるのだ。

偶然出会った子供達のお蔭で、ゴンパまでの道のりは迷うことも無く、住宅街の中を縫うような細い道を抜けると、数日前北京軍団の車に乗って通ったゴンパへの参道となる舗装された通りへ出た。丘の上に立つゴンパに向かってゆるやかな上り坂になっている道の途中で、私の目指していたマニ石屋があった。

この日もマニ石屋の店先には祈りの言葉が掘り込まれ美しく彩色されたマニ石が並べられていたが、あの日の私が店先でスケッチしたマニ石は当然のように姿を消しており、それを確認した私は大変満足すると、そのまま坂を登ってゴンパを目指した。

元々神社仏閣などを訪れるのは嫌いでは無い方だが、宗教への信仰心という意味で日本にいる間の私は、ほぼ無神論者といっていい。神社やお寺に行き頭を下げるのは信仰心からというよりは作法や習慣といった感覚で、お正月や旅先で神社仏閣を訪れる時以外に神様の事を想う機会などそうは無い筈だったのだが、そんな私がこの地を旅している間は何故かいつも神様の存在が身近に感じられる気がして、いつしが彼等のチベット仏教には強く惹きつけられていた。

恐らく参拝している者の多くが私と同程度の心持ちで

あろうと推察される日本のお寺は、きれいに手入れされ整えられて美しくもあるが、本来の存在意味は既に薄れてどこか余所余所しい美術品の様な存在に取って代わっているような気がするのだが、このチベット・エリアの随所に点在するお寺は、現在でも日々土地の人々の心の拠り所として強く機能している血の通った場所だ。

まるで極彩色に彩られた曼荼羅のように色鮮やかで、いつも線香のけむりとロウソクの匂いが立ち込めている薄暗いチベット寺院の中は、その微かな明かりに照らされほんやり浮かび上がる金襴緞子の御簾の後ろに、まるで地獄絵図の様な姿の無数の神々の姿がうごめいている。慈悲と残虐、性と生死がない交ぜになり下界に生きる人間の欲望や煩惱そのままに生々しく描かれるチベットの神々には、不浄とは無縁の世界に取り澄ましている日本の仏像仏画からは感じ得ない何か独特な魅力が感じられて惹きつけられ、私は思わず目を奪われてしまう。そして、そんな異空間の中に身を置いて本尊の慈愛に満ちた眼差しにじっとみおろされていると、日本のお寺では感じた事のない深い安らぎに包まれて思わず泣き出したいような衝動にかられ、自然に頭を垂れいつまでもそこでそうしたい気持ちになってしまうのだ。

今回の旅で2回目となる理塘ゴンパで気の済むまで過し、ゆっくりとこれまでの旅の安全と幸運に感謝を捧げると、これで私が理塘で望んだ事はすべて叶えられ、この土地に心残りなく明日の朝旅立っていけるすがすがしさのような物が感じられた。ゴンパまで一緒に付き合ってくれた子供達とは住宅街まで戻ったところで、昨日と同様アイスクリームをご馳走してお別れした。

宿に戻ると昨日知り合った日本人の学生と大阪のおじさんにも声をかけ、すでに理塘生活での日課となっている温泉に行った。この日は3人なのでタクシー代も安上がりだ。理塘での生活はこの温泉のおかげでとても充実していた気がした。やはり日本人は風呂好きなのだ。自由に入浴する事ができない土地で長く旅していると、一日の終わりに不便なシャワーでそそくさと汗を流すのとゆっくりお風呂につかるのでは、やることは同じでも意味合いが全く違ってくる。学生とおじさんも身体から湯気をあげ、久しぶりの入浴を喜んでいた。

理塘の街から郊外の温泉まで毎日通った、日暮れ時の草原の中を真っ直ぐに走る車窓の風景はいつ見ても美しいがどこか切ない。この風景を見るのもこの日が最後だと思うと、死ぬまでこの草原と共に暮らしていく理塘の住民達が少し羨ましく感じられた。車の窓から吹き込む風が爽やかだった。

既に日の暮れた理塘の街に戻った私たちは、昨日の続き

のように三人で食事を取るため外に出た。理塘での最後の晩餐は私の希望で串焼き屋の屋台だ。これまで訪れてきた四川省の何処の土地でも見かけていた、中国語で「カオ・チュアン」と呼ばれる串焼きの屋台はここ理塘にも例外なく存在しており、薄暗くなる頃になると何処からともなくやって来て店を開くのだ。

私たちの宿の前をはしる目抜き通りにそって小さな広場になっている場所には、夜になるといくつもの串焼き屋台が競うように並んで店を広げていた。単に串に刺した食材を焼き、香辛料を振りかけて食べるだけの串焼きでも、店によって味に差があるのか他に理由があるのか、賑わっている店もあれば、ガランとしている店もある。私たちはのんびりゆっくりしたかったのであえて込んでいる屋台は避け、高校生位の少女が一人でやっていた客のいない屋台に座った。

他所の土地を旅して、他国の人と交流する事は楽しいが、やはり自由に言葉の通じる同国人と同じ感性を共有しての会話はまた別の楽しさだ。互いにその日を理塘でどのように過ごしたかなどを報告し合って楽しいひと時を過ごしたが、やはり私は鳥葬の事は告げずにいた。

しばらくその場で談笑し夜もふけて来た頃、学生とおじさんは「そろそろ・・・」と宿に戻っていったが、私は理塘での最後の夜が惜しくてもう少しその場に居たかった。彼らとはその場で別れ、一人屋台に残ってそれまでの出来事を一つひとつ思い起こしていると、こうしてまた一日が終わる事で日一日と旅の終わりが迫っているのを肌で感じて、少しセンチな気持ちになりかけたが、屋台の少女とポツリポツリと話しているうちに気持ちが和んできた。

聞けば少女は18歳で、チベット族ではなく漢民族なのだそうだ。他所の土地から家族でこちらに働きにきているのだという。不思議な気がした。彼女がどこの土地からやってきたのか、その地名は既に忘れてしまったが、確かその土地は中国の中のそう小さくはない筈の都市の名前だったのだ。漢民族である彼女の家族が、なぜわざわざチベット人の土地である大草原の中の小さな田舎街に働くことを目的でやって来ているのか・・・人には人の他人には計り知れない様々な事情があるのだろう。まだ年若い少女が深夜の街に一人きりで屋台番をまかされている事も私の目には不自然に思えたが、彼女はそれを特に不満に思っている様子もなく「うちは宿屋もやっているのよ。」と屋台を出している後ろの建物を指差して見せた。尋ねてみると私の泊まっている宿よりも値段が安い。

「次に理塘に来た時はあなたのところに泊まるわ。」私は少女にいつ果たす事ができるのか定かではない口約束をしながら串焼き肉を口に入れ、心地良い夜風に吹かれながら理塘の最後の夜は更けていった。(続く)